

# 庄内の乱の語り部 恒古城跡保存研究シンポジウム



三木 靖 先生  
(鹿児島国際大学名誉教授)



木島 孝之 先生  
(九州大学大学院助教)



太田 秀春 先生  
(鹿児島国際大学准教授)



村田 修三 先生  
(大阪大学名誉教授)



原口 泉 先生  
(志学館大学教授)



これまでの恒古城跡の調査研究の結果を発表する「恒古城跡保存研究シンポジウム」が12月1日、恒吉地区公民館で開催されました。

恒古城跡は、大隅町恒吉に位置している中世の山城跡で、市指定史跡です。慶長四年(1599)の「庄内の乱」では、都城を本城とする12外城の一つとして、大きな役割を果たしました。

当日は、三木靖先生(鹿児島国際大学名誉教授)、村田修三先生(大阪大学名誉教授)をはじめ、5名の研究者をパネリストとして招き、午前は城跡の見学会、午後はシンポジウムと二部構成で行われ、約130名の聴衆が集まりました。

シンポジウムでは、恒古城の見方について、①恒古城独特の構造、②南九州ではあまり見られない畝状豎堀(豎堀が三つ以上連続するもの)、③廃城となった江戸期以降の城のあり方と3つのポイントをあげられました。

大きな空堀(水の張られていない堀)の外に畝状豎堀を構築

している恒古城独特の強固な構造は、「庄内の乱」当時の緊張状態を表しているとされました。また、恒古城は、その城としての役割を終えた後も、恒吉麓住民にとって精神的な拠り所となつたと話されました。

「中世の山城」と一般には馴染みが薄いテーマでしたが、研究者の方々が時にジョークを交えながら解説され、多くの方々に恒古城の持つ「価値」が伝わったようでした。



現地説明会の様子



パネリストの話真剣に聞く皆さん